

# 先進校の取り組み 「組織」「評価」「授業」

データからも浮かび上がったこれからのキャリア教育推進の課題に、先進校はどう取り組んでいるのか。「組織」「評価」「授業」のそれぞれに取り組む学校からヒントを探りました。

## 授業・行事・部活…学校全体で組織的に取り組むキャリア教育

深沢高校

東京都立

取材文／伊藤敬太郎

### 3年間を見通した キャリア教育計画を作成

深沢高校は、2007年、文部科学省から「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究推進校」の指定を受け、翌年度から本格的にキャリア教育を導入した。

その特色は、授業、生活指導、進路指導、特別活動、さらに部活動も含む、学校生活全体を包括した取り組みであること。生徒が段階を踏んで社会性や自主性、キャリア意識を育てていけるよう、進路指導部が3年間を見通したキャリア教育計画を作成し、これに基づいて、日々の授業、ホームルーム、学校行事、進路指導などが展開される。学年ごとの目標はもちろん、2〜3カ月単位で「基本的な生活規律の確立」「クラスや学校の員

としての意識」「働く』ことの意義」といった短期のテーマも定められており、教員全員が長期・中期・短期の目標を共有して教育・指導を行っている。

このような学校全体でのキャリア教育に取り組むに至った背景について、進路指導部主任の沢田彰先生は次のように振り返る。

「指定を受けた当時の本校は非常に荒れており、生徒が授業を受ける態勢すらできていない状況でした。そこで、当時の校長の号令のもと、まず、社会に触れることで、学校の勉強や継続してものごとに取り組むことの大切さを知ってもらおうと、1年次に全員参加のインターンシップを導入したんです。企業に生徒を送り出すために生活指導にも力を入れました。また、気づきの機会があっても単発で終わっては意味がありません。201

1年度からは生徒が多くの時間を過ごす授業の中にもキャリア教育の要素を入れていこうと、教科・科目の教育内容の改革も進めました」

### 生徒の意識は年々変化し 進路決定率なども上昇

特別活動としては、インターンシップのほか、認定NPO法人カタリバの協力を得て、大学生などと「なりたい自分像」や「将来の夢」について語り合う「カタリバ」を各学年で1回ずつ開催。また、学校行事や部活動は基本的に生徒中心で運営。自分で考え、意見を言い、行動する機会が豊富に設けられている。

一連の改革が実を結び、生徒の生活態度や進路への意識は大きく変化した。大学進学者数や進路決定率は右肩上がりです（2013年度卒

業生の進路決定率は87.6%。一方では中退率は大きく低下した。2012年にはキャリア教育優良学校として文部科学省の表彰も受けている。

このようなかたちでキャリア教育を実行するには、組織的なアプローチや協体制が不可欠。では、同校ではどのようにして教員間の意識の共有と団結を図っているのだろうか。沢田先生にポイントを挙げてもらった。

#### ① インターンシップでは 教員全員が巡回を担当

インターンシップは1年次の行事だが、3日間の期間中2日間は2、3年生も午前授業とし、企業への巡回は

#### School Data

1963年創立／普通科／生徒数597人(男子280人・女子317人)／進路状況(2013年度実績)大学37.8%・短大6.5%・専門学校35.1%・就職7.0%・その他13.5%



進路指導部主任  
主幹教諭  
**沢田 彰先生**

「単元単位でキャリア教育を意識して授業計画を作成することで、各教

員が自分の授業で具体的に何ができるかを考え、キャリア教育への理解を深めることにもつながっていました」  
(沢田先生)

② 各科目の単元ごとに  
キャリア教育の目標を明示

各教科・科目を担当する教員は、年間授業計画において、1年を通したキャリア教育の観点からの目標を掲げる（生徒に配るシラバスにも記載）。加えて、文部科学省が定める基礎的・汎用的能力のうち、授業の各単元で主にとどの能力を育成するかも図1のような体裁で記載する。

③ 生徒指導や授業態度に  
関するルールの統一と徹底

同校では、服装やあいさつ、さらに授業中の態度などの指導もキャリア教育の重要な軸の一つとしている。「ルールを守る」ことを理解させることがねらいなので、教員によって指導にばらつきが出ないように、基準を明確にし、かつ徹底させている。

④ 授業以外の時間は  
多くの教員が職員室に

「例えば、本校では生徒の登校時に約40人の教員の半数ほどが校門に立ちますが、これも教員間の意識の統一に役立っています」(沢田先生)

授業が終わった教員は、教科準備室などではなく、職員室に戻ってくるのも同校の特色。沢田先生自身も進路指導室にも机はあるが、常駐しているのは職員室。同じ空間で日々密にコミュニケーションすることが、生徒に関する情報共有や教員同士の関係強化にもつながっている。

図1 授業で主に育成する基礎的・汎用的能力

第3学年「情報B」の例

●キャリア教育の観点からこの教科・科目で身につける力

多様化する情報化社会で、誰もが情報の発信者になれる時代を適切に生き抜くために必要な情報活用能力の育成

●単元ごとに主に育成する基礎的・汎用的能力

	単元	人間関係形成・社会形成	自己理解・自己管理	課題対応	キャリアプランニング
1学期	コンピュータにおける情報のあらし方		○	◎	
	問題解決とコンピュータの活用	◎	○		
	コンピュータのしくみ			◎	○
	アルゴリズム			○	◎
2学期	アルゴリズム		◎	○	◎
	問題の解決方法		○	○	◎
	モデル化の方法		○	○	◎
3学期	コンピュータによるシミュレーション			◎	○
	データベースと情報検索	○	◎		
	データベースの作成	○	◎		
	社会を支える情報技術	◎	○		

◎=強く関連 ○=関連

※ 深沢高校平成26年度年間授業計画より一部抜粋

「本校は教員同士の仲が良く、職員室は常に笑いが絶えないですね。生徒が進路について相談に来たら、担任だけでなく、隣の進路指導部の教員が一緒になって対応するというのもよくあります。学年や分掌の枠を超えて協力して生徒の指導に当たる意識は、この職員室の雰囲気によって醸成されている面も大きいと思っています」(沢田先生)

このほか、分掌ごとに各学期1回は研修を開催する、年4〜5回は全教員が集まる飲み会も開催するなど、教員同士の交流や情報共有の機会が豊富に設けられている。また、部活動の顧問を4〜5人で担当する、担任以外の教員も個人面談を担当するなど、一人の生徒を複数の教員で見守る体制が整っていることも大きい。このような多角的な協力・共有体制作りがキャリア教育への組織的な取り組みを支えているという。